

# 小豆新品種「十育 180 号」栽培試験成績

帯広市川西農業協同組合

## 1. 目的

帯広市地域における小豆新品種「十育 180 号」の栽培適性について検証する。

## 2. 実施場所

帯広市川西町 帯広市農業技術センターほ場

## 3. 栽培方法

(1) 供試品種 : 「十育 180 号」(品種名: きたいろは)、「きたろまん」

(2) 面積および区制

1 区面積 25.2 m<sup>2</sup> (畦幅 66 cm×2 畦×19m) 反復無し

(3) 耕種等概要

土壌区分	土性	前作	畦幅×株間	栽植本数
沖積土	壤土	にんにく	66cm×18cm	8,417 株/10a

※ごんべいは種ベルトによる 1 株 2 粒播き

施肥量 (kg/10a)						防除回数	
施肥は種	肥料名	窒素	燐酸	加里	苦土	病害	虫害
5 月 22 日	農配小豆用 60kg/10a	3.0	13.8	8.4	3.0	3	4

## 4. 試験結果

(1) 生育調査

供試品種	出芽期	開花期	成熟期	刈取時期	倒伏程度
十育 180 号	6 月 1 日	7 月 14 日	8 月 22 日	9 月 7 日	極微
きたろまん	6 月 2 日	7 月 14 日	8 月 20 日	9 月 7 日	少
作況平年値 <sup>注1</sup>	6 月 1 日	7 月 25 日	9 月 17 日	10 月 4 日	-

供試品種	成熟期			
	草丈 (cm)	葉数 (葉)	莢数 (莢/株)	最下着莢位置 (cm) <sup>注2</sup>
十育 180 号	72.6	10.0	36.2	12.0
きたろまん	70.2	10.5	38.8	4.2
作況平年値	57.3	10.8	42.2	-

注) 1 作況平年値は「きたろまん」による

2 最下着莢位置は株ごとに莢の下端が地表から何cmにあるかを測定した。

- ① 異常高温により、草丈は長く、開花・成熟は大幅に早まった。
- ② 「十育180号」は「きたろまん」に比較し、開花期は同等だが成熟期は2日程度遅かった。
- ③ 高温障害による落花・落莢が多く、着莢数は平年を下回った。
- ④ 開花期以降の高温により成熟期間が大幅に短縮されたうえに、草姿が大きいにもかかわらず莢数が少ないことで、養分の転流先が不足して典型的な「莢先熟」となり、茎葉の黄化は停滞した。
- ⑤ この対策として、熟莢が100%になった早期に刈り取り、施設乾燥を行った。

## (2) 収量調査

供試品種	総子実重 (kg/10a)	製品子実重 (kg/10a)	左比	百粒重 (g)	屑豆率 (%)	等級
十育180号	185	139	120	13.2	25	3下
きたろまん	163	116	100	11.5	29	3下
作況平年値 <sup>(注)</sup>	306	-	-	14.2	-	3

注) 作況平年値は「きたろまん」にて調査

- ① 粒の充実が悪く、やせ粒が目立ち、高温登熟の特徴である濃赤粒の傾向も顕著だった。
- ② 子実収量は低いが、製品子実重では「十育180号」が「きたろまん」に比べ2割勝った。
- ③ 「きたろまん」の百粒重低下が著しく、「十育180号」との子実重の差に影響したと思われる。

## 5. 考察

- ① 異常な高温による生育障害の影響が収量に反映しているため、「十育180号」の収量性についての判定は困難と考える。
- ② 「十育180号」は胚軸が長いが倒伏は少ない。コンバイン収穫ロスの生じる可能性が高まる、地上10cm以下の莢割合が少ないため、コンバイン収穫適性は高いことが確認できた。
- ③ コンバイン収穫を前提とした栽培体系への導入は有望と思われる。



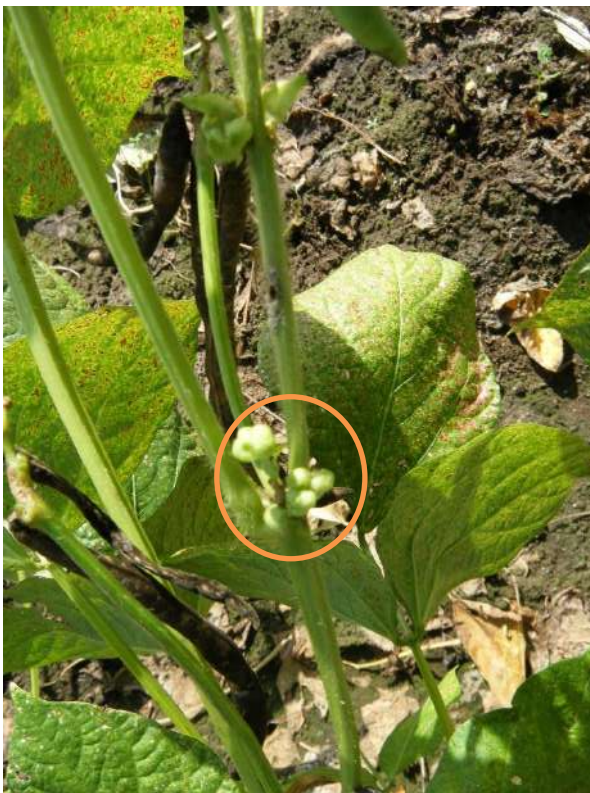
←8月24日 成熟期の草姿

未だに茎葉が旺盛に生育している



←9月7日  
刈り取り時の莢と葉  
(莢先熟の状態)

莢は黒変しているが、茎葉はやっと黄化が開始した程度。



←9月7日

高温生育の影響と思われる花房異常。  
着莢数が減少し莢先熟となった。



9月7日「十育180号」  
の地際→  
胚軸が長く、最下着莢位置  
が高いことがわかる。  
莢先熟による2次成長で  
開花が見られる。



←刈り取り時の  
草姿

胚軸長の違い  
が顕著にわかる

共に3等下の評価→

粒が痩せており、蒸れによる濃赤  
粒が著しいとの判定。



6月9日 胚軸長のちがい